

日本線虫学会ニュース

Japan Nematology News

目次

◆会長挨拶 (石橋信義)	1
◆事務局から	
1997-98年度役員選挙のお知らせ	3
1997年度日本線虫学会大会のお知らせ	3
第7回無脊椎動物病理学ならびに生物的防除国際会議 (VIIth ICIP 1998 Sapporo) のご案内	4
◆記事	
「ハチミツガ」か、「ハチノスツヅリガ」か (真宮靖治)	4
農研センターで研修を受けて (角屋竜雄・小杉一夫)	5
線虫研究者モドキの30年 (樋田幸夫)	7

会長挨拶

石橋信義 (佐賀大農学部)

私の任期もようやく終わりとなりました。この4年間に成し得たことは、事務局のご努力によって、学術会議に加入したこと、世界線虫学連盟 (IFNS) のメンバーになったこと等、確かに学会としての発展は感じとることができました。これに学会誌への投稿が盛んになって編集局が大忙しになれば、まさに順風満帆といったところですが、残念ながらこれだけがまだ50点といったところでしょう。私達の世界では、ジャーナルランキングというものは化学や物理学ほどの影響はありませんが、それでも Journal of Nematology とか Nematologica、Fundamental & Applied Nematology が最高位ということ

が大体の相場になっている (だから、こういう Journal に投稿される分には一向に構わない。むしろ奨励したい)。一方、IFNS 加盟の15学会のなかでは我が Japanese Nematological Society は The Society of Nematologists (SON) や European Society of Nematologists (ESN) に次いで世界で三番目の大きさです。尤も構成メンバーの数は SON や ESN の1/3ないし2/5程度ですが、単純に構成メンバーの数に対する投稿論文数の比率をみると、日本の線虫学会誌は SON、ESN などに較べて極端に低いと言わざるを得ません。実際に線虫でメシを食っているものがどれくらいいるかが問題だと言われると、返事に窮しますが、尚且つ日本の研究者は論文数が少ないことも事実です。私は今までにアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、イ

インド、マレーシアなどの研究者の賞や昇進に関する外部評価をやらされてきましたが、インド、マレーシアを除けば全部、論文数180編以上、それに著書（分担共著を含めて）を入れると200編以上になります。それが私よりも10歳以上若い者もいるので、どうすればこんなに書けるのか不思議なくらい。恥ずかしいけど私の論文数は未だ90編にはならない。あと2年で退職ときているから、もう無理です。論文が多くても自慢にはならない、という御仁もいるかもしれない。これは明らかに負け犬の言い草です。レフェリー2人以上の篩いに掛けられてペーパーとなるのだから、多ければ多いほど仕事をしたということになります。兎に角研究者と自負するものは、論文を書かねばならない。話は変わりますが、研究者の任期制とか国立大学を民営にせよとかいう論議が最近されています。研究者は本来バガボンドであるべきだと思うから、任期制そのものを私は否定しない。私が今より30年以上若かったら、これから世の中ますます面白くなるだろうと、欣喜雀躍したかもしれない。しかし、いまの若い連中の多くは任期制に反対している。確かに教育環境や生活環境が今のままで、アメリカの制度をそのまま取り入れるのは問題があるでしょう。でも何かしら日本の研究者はぬるま湯につかっているような気がしてならない。はっきり言って日本では日本人同士のcompetitionというものが見られない。見られるのは醜い企業間の秘密主義くらいなもの。企業の研究者も工業所有権に抵触しない限りどしどし論文を書いて欲しい。当然ながら学位も取って欲しい。これは将来任期制が本格的にすべり出した時、一番の難点は人

材不足ということになるからです。次の問題、国立大学の民営化。これは研究者の任期制よりも問題は大きい。私個人は、大学は文部省と決別すべきと以前から考えてきました。今の大学には大学の自治など微塵もない。みんな文部省の顔色ばかりを窺っている。しかし民営化には、これも若い連中から根強い反発を受けています。教育の機会均等を無くすとか、憲法違反とか、弱小大学は潰れてしまうとか。しかし、日本の大学教育の75%は私立大学に背負われているわけで、国立大学が無くなって一番痛手を蒙るのは、東京大学や京都大学など権威主義にぶらさがっている旧帝大となるはずです。みんなが私立大学になったら、もっと独創性のある人材が出てくるでしょう。日本が生き延びていくには人まねの上手な優等生である必要はない。最も理想的な形は文部省は金だけ出して、口は出さない。ということは先ずあり得ないけど、アメリカ合衆国のシステムを導入したかったらホントにここまでやるべきである。民営化にすると弱小大学は潰れてしまう。と心配する前に、教職員はもっと一致団結して努力することが要求される。それでも潰れるものは潰れたほうがよい。大体日本は大学が多すぎる。適当に淘汰されるべきである。しかし、国民の40%以上が高等教育を受けることができるようになりました。そのこと自体は素晴らしく良いことです。高等教育のパーセンテージが高くなった要因は女子学生の増加にあります。ここ2、3年の日本線虫学会でも女性の参加者を見ることができるようになりました。でも一步外に出て欧米の学会にでも出ると、女性の線虫研究者がどれほど多いことか。もともと男

女の比が1:1であるから当然ではあるけど、我々の学会もそうあってほしい。私の独りよがりかもしれないけど、線虫学そのものは女性に向けた学問ではないかと思う。繊細できめ細かな観察と解析は何も女性だけの専売特許ではないけど、線虫学には絶対的に要求される資質です。

最後になりましたが、4年間のご協力本当に有り難うございました。私自身学会の発展に皆様のご期待に沿えるほど努力しなかったことを恥じます。会員の皆様方には、これからも日本の線虫学の発展のために、益々のご研鑽とご健康を祈ります。

[事務局から]

[公示] 1997-98年度役員選挙

選挙管理委員会

1995・96年度の役員の任期が本年3月末日をもって満了となりますので、本会会則にしたがい、1997・98年度の役員選挙を下記の要領で行います。

投票方法及び投票上の注意事項

◎会長は、会員名簿の中の正会員の中から1名を選んで、会長選挙用の投票用紙に氏名を記入して下さい。

◎評議員は、会員名簿の中の正会員の中から10名以内を選んで、評議員選挙用の投票用紙に氏名を記入して下さい。

◎会長選挙用投票用紙及び評議員選挙用投票用紙には、候補者の氏名以外は記入しないで下さい。

◎会長選挙用及び評議員選挙用の投票用紙は、内封筒と一緒に入れ（この封筒は

無記名とする）、さらに返送用封筒（必ず住所、氏名を記入する）に入れて、本会事務局宛に郵送または持参して下さい。

◎会員名簿、会長選挙用及び評議員選挙用の投票用紙、内封筒及び返送用封筒は本ニュース発送に当たり同封しました。

投票締切

1997年3月17日（月）正午までに、本会事務局に必着するよう、郵送あるいは持参して下さい。

その他

本会則に従い現会長である石橋信義氏は3期目の会長の任期を務めることはできませんので、同氏に対する会長投票は無効票となりますのでご注意ください。評議員に関しては再選多選に関する規定はありません。なお、本選挙に関わる会則及び細則は、会員名簿の後に印刷してありますので参照して下さい。

1997年 日本線虫学会 第5回大会のお知らせ

1997年度（第5回）本会大会を下記の通り開催します。詳細な内容については、現在、大会事務局と学会事務局で検討中です。大会案内および講演・参加申し込み要領については、本年5月発行予定の本会ニュースに掲載予定です。大会に関するご意見・お問い合わせは、下記大会事務局または学会事務局までお願いします。

会 期 1997年9月3日(水)～5日(金)
3～4日 大会、シンポジウム
5日 エクスカーション

会 場 札幌市北方圏センター（札幌市
中央区北3条西7丁目 道庁別館12F）
または、カデル2，7（札幌市中央区
北2条西7丁目）
シンポジウム 「冷涼地における線虫問
題の現状と展望」（仮） 3人の講演
を予定
大会事務局 北海道農業試験場線虫研究
室（〒062札幌市豊平区羊ヶ丘1番地
Tel 011-857-9247）

第7回無脊椎動物病理学ならびに 生物的防除国際会議（VIIth ICIP 1998 Sapporo）のご案内

標記国際会議の運営委員長である飯塚
敏彦 北海道大学農学部教授より、本学会
に対し同会議への運営協力依頼がまいり
ました。事務局としては、学会ニュース
等を通じて積極的にPRすると共に、同
会議に関する情報等が入りましたら随時
お知らせする予定です。今回は案内文書
の中から主な部分を紹介します。なお、
同会議の運営委員には本学会会長である
石橋信義 佐賀大学教授も名を連ねていま
す。

第7回 無脊椎動物病理学ならびに生物 的防除国際会議（VIIth ICIP 1998 Sapporo）

第4回 *Bacillus thuringiensis*に関する国 際会議

会期 平成10年8月23日(日)～28日(金)

会場 テルメインターナショナルホテ
ル札幌（札幌市北区）

内容 総会、特別講演、シンポジウム、
研究発表、ポスターセッション、
エクスカージョン

参加者範囲 SIP会員 国外 250名
国内 50名
SIP非会員 国外 100名
国内 100名

参加費 25,000円（予定）

なお、詳細につきましては、学会事務局
または石橋教授までお問い合わせくださ
い。

【記 事】

「ハチミツガ」か、「ハチノスツ ヅリガ」か

真宮靖治（玉川大学農学部）

昆虫病原性線虫の *Steinernema* 属およ
び *Heterorhabditis* 属線虫の研究で欠かせな
いのが greater wax moth、すなわち、
Galleria mellonella (L.)である。線虫の増殖
をはじめ生理・生態的特性や宿主－寄生
者関係の解明、また交配試験などその用
途は広い。実験室での線虫増殖に最初に
用いられたのがこの greater wax moth の幼
虫であった。Dutky & Hough (1955)は1頭
の幼虫で10万頭をこえる *Neoplectana*
carpocapsae (DD-136)の感染態幼虫がえら
れると報告した（Poinar, 1979による）。
実験室で容易に飼育・増殖できることが
実験材料としてのこの虫のなによりの利
点である。

わが国でも、昆虫病原性線虫研究の当
初から「ハチミツガ」幼虫の名のもと、
Galleria mellonella は広く用いられてきた。
日本線虫研究会、さらには日本線虫学会
にあっても、これまでは「ハチミツガ」
の呼称が一般的である。いわば慣行とし

での定着である。

玉川大学農学部昆虫研究室はミツバチ研究の伝統をもち、学内の学術研究所にはミツバチ研究の分野も確立されていて、研究が盛んである。筆者は玉川大学で昆虫病原性線虫の研究に取り組むに当たって、ハチミツガ幼虫飼育に関し、学内のミツバチ研究グループにはいろいろとお世話になっている。その際、学内では「ハチミツガ」ではなく、「ハチノスツヅリガ」の名が普通に使われていることを最初は奇異に感じたが、その根拠を知るにつけ、どちらを良しとするのかの判断に迫られた。

わが国でみられるミツバチには、ニホンミツバチとセイヨウミツバチの2種があって、飼育される巣箱内には大型の巣虫と小型の2種の巣虫が発生するという。大型の巣虫、すなわち *Galleria mellonella* は世界共通のミツバチ大害虫であり、多数の論文の発表で、生態、被害の概要は明らかにされている。これら3種の巣虫は、分類学上、メイガ科、ツヅリガ亜科に属していて、大型種がハチノスツヅリガであり、小型種はコハチノスツヅリガとウスグロツヅリガである。岡田（1988）は、ハチノスツヅリガに対してハチミツガ、スムシ、スガなどの和名が使われているが、井上ら（1982）に従うなら、ハチノスツヅリガに統一すべきであるとした。また、平嶋義宏監修（1989）の日本産昆虫総目録でもハチノスツヅリガの和名があげられている。また、農林害虫名鑑（1987）では、ハチノスツヅリガに対して、ハチミツガの名は括弧付きで付されている。このようにみると、*Galleria mellonella* に対する和名は、ハチノスツヅリガが優位にあると

考えられる。学内のミツバチ研究グループの助言も、ハチノスツヅリガを使った方がよいとのことであった。

昆虫病原性線虫の研究はこれから大いに進展することであろう。当然、ハチノスツヅリガ幼虫が取り上げられることも多くなり、和名の混乱は統一という形で收拾しなければなるまい。そこで、日本線虫学会では、今後できるなら「ハチノスツヅリガ」に統一するようここに提案する次第である。いろいろとご意見お持ちの方もおられると思う。議論を経たうえでの結論を待ちたい。

参考文献

- Poinar, G. O. Jr. (1979). *Nematodes for Biological Control of Insects*. (CRC Press: Boca Raton, Florida). 277 pp.
- 岡田一次（1988）. ミツバチと3種の巣虫. ミツバチ科学9: 145-149.
- 井上寛ほか（1982）. 日本蛾類大図鑑・I: 解説編. 講談社, 東京. p.374.
- 平嶋義弘監修, 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター共同編集（1989）. 日本産昆虫総目録. II. p.960.
- 日本応用動物昆虫学会監修（1980）. 農林害虫名鑑. 日本植物防疫協会, 東京. p.59.

農研センターで研修を受けて

角屋竜雄（横浜植物防疫所）

昨年10月末から11月にかけての1か月間、農研センター線虫害研究室で植物寄生性線虫に関する研修を受けました。内容は線虫の同定の基本を中心に、幅広

く行われ、大変に有意義なものでした。研修期間中は清水室長を始め、研究室の方々には大変お世話になりました。

私と線虫との接点は、学生時代に石橋教授の顔を見た時にさかのぼります。しかし、当時は不良学生だったため、実験もそこそこにやっとのことで卒業でき、これで線虫から解放されたと思っていたら、また、数年前から線虫を扱う仕事に従事しているというのが現実でした。

さて、私の勤務する植物防疫所は、輸出入農産物に付着する病害虫の検疫についての仕事为主な業務で、私はその中でも、線虫に関する国内外の情報収集と発見される線虫の同定を行っています。

現在は特に植物防疫法の改正に伴う業務を中心に進めています。これに関係する線虫の分野では、佐賀大学の近藤教授の御意見を伺いながら作成中であります。この過程をみていくと今後植物検疫の面において、線虫の同定がより一層重要なものになってくると考えられます。また、同定においても今までのような形態的な面からだけでなく、生化学的手法の利用など幅広いものが要求されてくると考えられます。

このようなことから、現在はまだ経験不足で未熟ですが、今回の研修を1つの起爆剤として、今後線虫に関する十分な知識を得て、植物検疫の立場から参加していきたいと思っています。

農研センターで研修を受けたのですが、

小杉一夫（タキイ種苗）

当社では、以前からトマトのネコブセ

ンチュウに対する抵抗性育種を行っており、ネコブセンチュウを取り扱っていたのですが、なにぶん専門家もおらず、安定した維持管理ができず困っておりました。近年では、ネコブセンチュウ抵抗性品種を侵す抵抗性打破系統も出現し、ますますネコブセンチュウ抵抗性育種が重要となってまいりました。

また、各種野菜、花卉において、線虫が原因と思われる病害も多くみられ、ベルマン法で線虫を分離し、種の同定とは言わないまでも属レベルの同定の必要性も出てきました。そのような中、今年の11月に1ヶ月と短い期間ではありましたが、農研センター線虫害研究室にて、基本的な線虫の同定法から接種、増殖法まで勉強させていただく機会を得ることができました。

研修では、ネコブセンチュウの同定法を中心に、シスト、ネグサレセンチュウを含め広く浅く取り組みましたが、当初は短期間でどの程度のことができるか大変不安でした。しかし、幸運なことに横浜植物防疫所のセンチュウ同定のプロフェッショナルである角屋さんとご一緒にすることになり、清水室長、奈良部さんにご教授いただいた後、角屋プロに補習までしていただく豪華なメニューで1ヶ月を過ごすことができました(角屋さんには大変ご迷惑をかけました)。生活面でも、家族と離れ、私が寂しい(楽しい?)思いをしているのを察してか、奈良部さんがユーモアに富んだお話を絶えず聞かせてくださったり、清水室長に美味しいお蕎麦を食べに連れて行っていただいたり、大変楽しく過ごせました。

以上のように大変有意義な研修を受けたのですが、会社に戻ってくると報告や

所用に追われ、師走、忘年会、大掃除、大晦日、正月、新年会と過ぎ、今日に至っており、線虫のセの字も線虫に取り組めておりません。しかし、今後は、農研センターで学んだ事をベースにして、仕事に積極的に取り組んでいきたいと思ひます。また、この場をお借りして、お世話になりました清水室長、研究員の皆様ならびに横浜植防の角屋氏にお礼申し上げます。

追伸：学会員の皆様、野菜、花卉等線虫病害発生の情報(タキイ品種でなくても構ひません)がございましたら、ぜひ当方までお知らせいただければ幸いです。

線虫研究者モドキの30年

樋田幸夫(国際農林水産業研究センター)

研究の端緒と顔見せ

確か1969年頃ではなかったでしょうか、旧蚕試の害虫研究室でクワ害虫の研究に従事していた小生が、西ヶ原にあった農技研の線虫研究室に6か月ほどご厄介になり、一戸稔さんはじめ研究室の方々に植物寄生線虫について研修を受けました。これが小生の線虫研究の端緒となりました。一戸さんは、線虫の実験的指導だけでなく、応動昆雑誌に外国の線虫文献の抄録掲載の場を与えて下さるなど、小生が線虫研究者として一人歩きが出来るようにと、懸命に後援して下さいました。日線虫研誌初巻に小生の「メキシカンマリーゴールド」についての小論が掲載されることになったのも、一戸さんの推挙と三井 康さんの支援があったからでし

た。その後、西沢 務さんと長野園試におられた伊藤喜隆さんにネコブセンチュウ(以下、センチュウ省略)の会陰紋による同定の手ほどきを受け、さらに鴻巣にあった農事試で大島康臣さんと百田洋二さんからワセンチュウなど外寄生性線虫について教えて頂きました。以来、線虫研究者の末席を汚すことになり、1971年、農工大(府中)で開催された第15回応動昆大会で、「クワの線虫害」についてオドオドしながら講演したのが、この業界での冴えない顔見せとなったわけです。

心に残るアドバイス

線虫研究30年のうち、前20年は主にクワの線虫に、後の10年は熱帯作物の線虫にかかわってきました。この間、諸兄から種々有益なアドバイスやコメントを頂きました。なかでも、*M. suginamiensis*の新種記載に逡巡していた時、百田さんの「ワセンチュウなどは気軽に断定するのに、ネコブではなぜ躊躇うのか」という言葉が、小生と八重樫隆志さんに記載を決断させるきっかけとなりました。百田さんはまた、今、荒城雅昭さんが筆頭となって新種記載の準備をしているクワからのネコブ(クワからの*M. arenaria*とされてきたもの)の会陰紋の写真を見て、即座に新種だと喝破したと聞きました。驚くべき洞察力というべきではないでしょうか。また、中園和年さんの「研究者たるもの、年齢の如何を問わず、年に最低一つのレポートは書くこと」という求道者的な自戒のお言葉、小生、肝に銘じましたが、結果として後述するように校閲者を悩ますことになりました。

お世話になった論文校閲

小生が「*M. mali*の生態と防除に関する

研究」という論文の評価を農業線虫ご三家の一戸さん、西沢さんおよび後藤 昭さんに唐突にお願いしたことがありましたが、ご三家は釈然としないながらも、お墨み付きを出して下さいました。お三方の武士の情けに深謝しています。ほかにも論文のことでは多くのひとのお世話になりました。小生の英文の処女作は、ある校閲者の言によれば「木に竹を繋いだような代物で手におえない」ものでしたが、もう一方のレフリーだった稲垣春郎さんが、修文とそのか所を具体的に明示して下さいた時は、たいへん有り難く、校閲者のご苦勞が並大抵ではないことを知らされました。しかし、反省の色もなく小生は、その後も校閲者泣かせの駄文を投稿し続け、特に皆川 望さんにはたいへんご厄介になりました。ご本人が迷惑そうな素振りを全く見せなかつただけに、かえって恐縮しています。

熱帯での仕事の中から

小生、タイ農業局(DOA)へ出張中、佐野善一さんと水久保隆之さんに応援を頼み、それぞれ約1か月在タイして頂きましたが、折角の機会であったのに、お二人に熱帯の線虫について研究して頂く十分な体制がとれなかったことと、この国のほんのわずかな部分しか案内出来なかったことが悔やまれます。水久保さんはタイから *Pratylenchus* の新種、*Tylenchorhynchus* および *Helicotylenchus* の未記録種を報告していますが、ネグサレを除く大半は、DOA大食堂前の植物園の硬い土壌を単独で掘って得た材料から発見したものです。佐野さんも構内の野草などからネコブを採集し、DOAの研究者を驚かせました。お二人は、農業局構内という身近な場所でも実験材料の採集が可

能であることを示し、短期間でも成果をあげ得る一つの方法を示してくれました。この手法がのちに、八重樫さんとDOAに短期出張し、ネコブの酵素表現型による種の同定実験を行った際、材料採集に生かされました。

小生のタイDOAでのカウンターパート、Mr. SomkuanとMrs. Nuchanart、スリランカ園芸作物調査開発研究所(HORDI)のDr. Ekanayake、その他飛び入りの海外研究者が来日した折には、いつも農研センターの清水 啓さん、奈良部 孝さん、前農環研の皆川さん、森林総研の清原友也さんはじめ研究員のみなさん、九州農試線虫制御研、北海道農試線虫研のみなさんに面倒をみて頂き、助かりました。昨年、Mrs. Nuchanartが来日した折には、吉田陸浩さんと伊藤賢治さんにもご教授をお願いしました。この時、佐賀大にもお邪魔し、石橋信義、近藤栄造両先生に彼女を紹介する機会を得ました。

残された仕事

特にクワの線虫の未同定種ではっきりさせたいと考えていたものが、いくつかあります。その一つは *Cryphodera* sp. です。平田明由さんのご案内で群馬蚕試のクワの根についているこの線虫を見た時、強い印象を受け、その和名の由来に得心した次第です。この線虫、新種の可能性もありそうなので、荒城さん、奈良部さんあたりに調べて頂けないものでしょうか。

沖縄のクワから採集された *Hoplolaimus* sp., *Paratropharous* sp. 及び *Hemicyclophora* sp. など、これに類似したものは後藤 昭さんが別の作物から報告しておりますが、いずれも種が不明のままです。これの解明は水久保さんをお願いしたいですね、などと勝手に言っているものでしょうか。

今年、八重樫さんとタイのウドンタニのクワから採集した未記載種と思われるネコブの同定、これは引き続き二人の宿題となるでしょう。

これは日本線虫学会へのお願いですが、線虫学学術用語集の見直し作業の一つとして、とりあえず、今日までに判明している本邦産線虫の種類（植物寄生、昆虫寄生、marine nema など）のリストの早急な作成を検討して頂けないでしょうか。

これからの身の振り方

今日まで30年、一応「線虫研究者」の端くれとして、決して高いとは言えない月給で糊口を濡らしてきたわけですが、それでも自分の仕事の成果が科学技術や農業にどれほど貢献してきたろうかと考えますと、この月給でもなお過分であると思えてきます。春闘で3万円賃上げをいいながら、なにか空しく、照れくさい思いがして、振り上げる拳に力が入らな

いのは、要求が実現性に乏しいと思っているからだけでなく、自分の仕事の価値に疑問を感じているためではないでしょうか。退職後、農林省という後楯なしにどれほどお金を稼げるかと考えると、甚だ心もとない限りで、自分が今の社会でほとんど商品価値がないことを思い知らされることになるでしょう。

できれば、報酬はわずかであっても、時間やノルマにあまり縛られず、しかも頭を使わない仕事につけたらと考えています。そして、脚が丈夫なうちに日本百名山などを踏破し、あわせて各地の生物、特に魚や野草などを見て歩きたいと思い描いてますが、話がこんなにうまく行くものでしょうか。

最後にもう一度、皆さん、たいへんお世話になりました。とはいえ、日本線虫学会にはなお在籍させて頂くつもりですので、今後も宜しくお願いします。

日本線虫学会、この中心をなす内会会大平7001、1010101 [スーニ会学虫線] 号内
、国語の史籍が貴重。をまじり「東洋学事蹟の沿革の員会おスーニ本。すす安千研
面刊強下、このすす辭語より管内のものと著家野のへ員会おス大平会学、告辞の臨会謝
。うちス>サ書はき謝願すま

日本線虫学会スーニ会
幸 晴良奈・立瀬野久木：当田業謝
前 び立・毫業印申

1997年5月14日
日本線虫学会評議会
立瀬野久木 香野貴業謝
事務局長 立瀬野久木
室突形崎崎史籍崎盤基謝世
頂志合西崎史籍果本煎11-188千
1545 墨家宇大
TEL 098-545-1120 (外)
FAX 098-545-1005

〔編集後記〕

◆学会の会長・評議員選挙が近づいてきました。選挙の公示期間の関係もあって、もっと早くニュースを出すべきだったのですが、遅れてしまい申し訳なく思います。どうやら原因は私の原稿依頼の遅れにあったようです。さて、玉川大学の間宮先生が「ハチミツガカハチノスツツリガカ」と題して、蛾の和名の適否を論議下さいましたが、線虫の方にもいろいろ問題があるようです。線虫の学名が変わって実態に合わなくなった和名、寄主植物の誤解を招く和名が散見されますし、ジャワネコブかアレナリアネコブかという問題も出てきました。ネグサレセン

チュウでも学名と和名の整理が必要になりそうです。次期線虫学会の執行部に和名の改訂作業への着手を期待します。

（水久保隆之）

◆今回は会議シーズンの合間を縫っての名簿づくりと選挙準備とニュース編集となりました。名簿の誤り、ニュースの記事の誤り等あるかと思いますが、訂正箇所がありましたらご面倒でも事務局までお知らせください。また、選挙の投票締め切りまでの期間が短くなってしまいました。どうぞ棄権せず、事務局まで投票用紙を返信ください。ご協力の程よろしくお願いします。（奈良部 孝）

次号「線虫学会ニュース」No.10は、1997年大会案内などを中心に、本年5月に発行予定です。本ニュースでは会員の皆様の記事を募集しています。身近な線虫の話題、諸会議の報告、学会または会員への提案等どのような内容でも結構ですので、下記住所まで原稿をお寄せください。

1997年2月14日
日本線虫学会発行
編集責任者 水久保隆之

九州農業試験場
地域基盤部線虫制御研究室
〒861-11熊本県菊池郡西合志町
大字須屋2421
TEL 096-242-1150(代)
FAX 096-249-1002

日本線虫学会ニュース第9号
編集担当：水久保隆之・奈良部 孝
串田篤彦・立石 靖
